

蕭湘斑の長煙管で、

一服吸へば五色の雲は、

喉首のあたりを舞ひ出でて、

霞のやうに棚引かう。

更に一服吸ふたなら、

青龍、黄龍躍り出る。

これは彼等の煙草に對する單純な讚美の表現と看做すべく餘りに、自己をさげしみてゐる。然し、彼等はなんの恥らう様もなくこれを唄つてゐる。然も最も愛誦してゐる普遍的なものなのである。傳統的思想を如實に物語つてゐるその心理こそは、いかに彼等が環境の奴隸であることが知れやう。

これぞ全體誰の徳、

飯を食べるも天の徳、

着物を着るも天の徳、

酒を飲むのも天の徳、

安氣に眠るのも天の徳。

朝鮮の農民達はこんな唄ひつづけてゐる。そこには階級的争闘心もなければ、權謀術策もない。平安な眠りをむさぼつてゐるのである。又、朝鮮の子供達も。

内の父ちやん音頭とりや、

わたしは浮れて踊るのに。

お天道様は可笑しいな。

太鼓叩いて泣きなさる。

雨にふられて楊柳の枝は、

あつちにゆらゆらこつちにゆら〜

軒ばたのこすすめは、

お腹が空いてちちちちちく。

ああほんとにさびしいな。

何處にも、遊びにゆかれない。

お隣さんじよの友達は、